

親鸞聖人の白道をたどる ①



ゲスト
岡村 喜史さん

親徹宗さんが毎回ゲストを招いて、親鸞聖人のご生涯をたどる対談コーナー。第1回のゲストは、真宗史が専門の岡村喜史さんです。

聖人の人物像を知るには

釈 今回のシリーズは、親鸞聖人のご生涯、その足跡を誌上で旅して、親鸞聖人の人物像に迫っていくという、私にとってもありがたい企画です。いわば追体験の旅。これを始めるにあたって、まずは予習が大事！ということ、岡村先生に歴史学の観点からいろいろ教えていただこうと思います。最近の研究でわかったことや、現時点で論点となっていることなどをお聞かせください。

岡村 人物像ということですが、親鸞聖人ご自身のことは、ほとんど記録が残っていないんですよ。釈 ご自身による記述はほんの少ししかない。岡村 親鸞聖人のご自分のことを書いておられるのは、『教行信証』の最後の後序の部分で、法然聖人のもとで『選択本願念仏集』の書写を許されたとか、法然聖人の真影を描くことを許されたとか、流罪になったとか、そのくらいしか書かれていません。それ以外についてはほとんどわからないんです。釈 お弟子さんたち、孫やひ孫が聞き書きをしたものが少しありますね。岡村 それも非常に少ない。あとは妻の恵信尼さまの書かれたお手紙。そこで断片的に、素顔とい

うか人間らしい親鸞聖人がわかるぐらいです。また、ご自身が書かれたお手紙というのはいはり自分を吐露しておられるところがありますので、非

常に伝わってくるものがあります。親鸞聖人のご生涯は、これまではずっと、聖人のひ孫の覚如上人が書かれた『御伝鈔』に則って語られてきました。覚如上人は親鸞聖人と直接お会いになつていないのですが、しっかりと取材されています。ただ、現在、異論を唱える説はいろいろあります。釈 たとえばどのような？

岡村 たとえば、親鸞聖人が九歳で出家得度されるというのはあり得ないという異論ですね。釈 ほう。

岡村 当時の出家得度というのは、いわゆる元服今の成人式に相当するから、当時の一般的な社会の中では、だいたい十二、三歳から十七歳ぐらいが普通なので、それから考えると九歳というのはちょっと考えられない、と。

釈 新たな史料が出てきたとかいうのでなく、当時の社会状況や慣習などから考えると、ちょっと



ゲストの岡村喜史さんと親徹宗さん

齟齬がある、ということですね。

岡村 ええ、一般論からの切り口です。ほかにも親鸞聖人の出自である日野家と、聖人がお得度を受けられた慈円和尚について、当時の社会的地位が大きく違うから接点はないだろう。もし慈円の元での出家得度なら、「慈」「円」というどちらかの一字を受けるはずだが、当初の聖人の名は「範宴」だから、慈円との接点はそこで証明できない、というような論法です。

釈 当時の制度や慣習などから類推することで、伝承を考察していくわけですね。

岡村 一般論で切ると、まあ簡単に言えるんですが、私たちは、残された親鸞聖人に一番近い記録の中で考えていかなければならない、という方法で研究していますので、単純に否定していくのはいかなものかと思っております。たとえば、親鸞聖人以外の事例でみていきますと、法然聖人が

の間は、仏門に入り出家をするための修行として基礎的な体験をしていかれるようになった、それが九歳の時だった、と考えるいくべきじゃないか、と私は思っているんです。

釈 それなら整合性が高い。

岡村 そのうち、なんらかの家庭の環境が整った段階で、正式の僧侶になる。親鸞聖人は二十九歳まで比叡山で天台宗の僧侶をされていたということとは崩せないことですから。

釈 そこは間違いはない。

岡村 ええ、その出発点をどこにするか、ということですね。

日野の里で幼少期を

釈 ところで、これから親鸞聖人の足跡をたどる旅を始めるのですが、いろいろアドバイスをお願いします。最初はどこへ行けばよろしいですか？

やっぱり九歳で仏門に入られるんですね。

釈 はい、美作(岡山県)のほうで。

岡村 お父さんの漆間時国が殺されて、仏門に入らざるを得なくなり、地元のお寺に入られるんですが、それが九歳です。そして十五歳で比叡山に入られて、正式の僧侶になられた、ということですね。七高僧の中では源信和尚も九歳で仏門に入っておられる。だから九歳というのも…。

釈 事例がないわけではないんですね。家庭の事情なり、なんらか個別の事情があつて九歳で出家した人がいないわけじゃない。

岡村 はい。そこでポイントになるのは、本当にそれが出家だったかどうか、という問題です。

釈 といいますと。

岡村 九歳という段階で自分自身を養育してもらえない保護者がいない、恵まれない状況になつたので、お寺に入らざるを得ない。そこで、しばらく

やはり日野の里でしょうか。

岡村 日野の場所というのは、南に木幡という所があつて、さらにその南に宇治の平等院があります。あの辺りというのは、当時はいわゆる生活空間じゃないんですよ。

釈 人はあんまり暮らしていなかったんですか。

岡村 普段に暮らす所じゃないんです。木幡という所は藤原家とか、摂関家とかがお墓をつくる場所なんです。平等院も藤原道長が別荘を作つた場所なんです。あの辺りは風光明媚な場所なので、夏場に避暑に行つたり、秋に紅葉狩りに行



岡村喜史さん

1962年奈良県生まれ。龍谷大学大学院博士課程単位取得退学。龍谷大学准教授を経て現在、本願寺史料研究所研究員。中央仏教学院講師。専門は真宗史。

ったり、そういうことをする場所なんですよ。日野有範ありのりは役人ですから、京都へ通わなければならぬ。当時、日野から毎日通えない場所です。積 そうなんですか。役所勤めができないような場所なんですね。

岡村 ですから日野に日野有範が住んでいた、そこで親鸞聖人が生まれた、というのはちよつと考えにくいと私は思います。

積 日野で暮らしていた可能性は低い…。

岡村 ただですね、日野誕生院の隣に法界寺ほうかいというお寺がありますね。今は真言宗ですけども、あそこの阿弥陀さまは親鸞聖人より前の時代からあります。聖人の頃に、あのお寺に大きな阿弥陀さまが六体ほどあったらしいんです。記録があります。

積 そうなんですか。

岡村 親鸞聖人が生まれた頃というのは、ちょうど日野の里。では、その次に向かうのは、お心得されたのは青蓮院しょうれんいんでしょうか。でも、当時、青蓮院はなかったそうですね。

岡村 青蓮院というお寺はまだなかったんですけども、その当時、白川坊さくがわぼうという僧坊そうぼうを慈円和尚は里坊さとぼうとして持つておられました。それが今の青蓮院の境内を含めた北側にあたるようなんです。

積 ははあ、慈円さんの里坊がありましたか。

岡村 はい。というふうに考えて、今の青蓮院の一部の所に慈円さんの里坊である白川坊があった、と考えていいと思います。

兄弟全員が出家するということとは

積 そうですね。ありがとうございます。勉強になりました。ところで、慈円さんですが、その後の親鸞聖人にそれほど大きな影響を与えた感がないんですけども…。もし、慈円さんの元で仏道の



しゃく てっしゅう
積 徹宗さん

1961年大阪府生まれ。大阪府池田市・如来寺住職。相愛大学教授。専門は宗教学、比較宗教思想。グループホームを運営するNPO法人リライフ代表。

ど源平げんぺいの争乱のややこしい環境の中にあつたので、親鸞聖人は京都のそういう戦いくさを逃れるため、日野に一時避難されていた可能性は非常に高いんですよ。

積 あ、一時避難ですか。

岡村 その時に、阿弥陀さまにお参りされた、そういう可能性は高い。そういう意味では、日野の里という所は、親鸞聖人の幼少期の、阿弥陀さまに対する思いを培つちかわれた場所であるのではないかなど私は思いますけどね。

積 幼少期を過ごされたエリアではあると。それ

最初の一步を踏み出されたとしたら、もう少し言及されてもいいような気がします。しかし、親鸞聖人のご著作に影響を受けた形跡も見当たらないように思います。慈円さんは九条兼実かねざねの弟ですね。

岡村 そうです。

積 親鸞聖人のおつれあいも九条兼実に近い関係の人だったことを考えると、もう少しなんかからみがあつていいんじゃないかとも思うのですけれども。あまり影が見えないですし、真宗教学の上でもさっぱり登場してこないでしょ。慈円さんとはどういう関係だったんでしょうね。

岡村 慈円さんというのは、親鸞聖人、法然聖人と対立軸にある方ですよ。慈円さんの書いた『愚管抄ぐんしやう』という書物の中では法然聖人の念仏を非難されています。

積 ずいぶん悪口書いてますね。

岡村 兄の九条兼実が信頼している念仏をあえて

そこまで書く？ というのは腑に落ちないかもしれないですけども、やはり慈円さんは、天台座主に四回なるだけの人ですよ。

釈 立場上、本丸を守っていた人です。

岡村 そうです。顕密仏教といわれる、一般的には旧仏教というような言い方をされるものの、いちばん根幹の中心におられるわけですよ。そういう方が念仏はいいとは言えないです。

釈 立脚地点が違ったんですね。

岡村 ですから本音と建前の中で、やっぱり慈円さんは念仏に対しては天台宗の立場で擁護できないし、そういう立場を理解して、あえてそれを非難するという立場の発言をせざるを得なかったんじゃないかなと思うんですね。ただ、念仏が弾圧された承元の法難の時にですね、親鸞聖人とともに法然聖人と門弟が七人、流罪になるんですが、この中の行き先が決まらない二人については、慈



円さんが身元を引き受けました。

釈 そうなんですか。

岡村 ということはやはり、お兄さんの九条兼実

の申し入れがあったのかもしれないですし、そういう人たちを「知らん」で済ませるのではなく、

自分の所で引き受けたという。

釈 陰でサポートしていた面があるかもしれないということですね。もう一つお聞きしたいのは、親鸞聖人のご兄弟は皆さん出家されたようですが、それは割としばしばあることなんでしょうか。それとも大変めずらしいことですか？

岡村 いやあ、かなりめずらしいと思うんですね。結局、五人の兄弟みんな出家しておられるんですよ。全員出家するということは、有範家というのは跡が絶えるわけです。世俗の家筋としては。

釈 そうですよ。

岡村 有範家は分家の分家ですので、どういう環境の中でそうなったのかはいろいろと課題がありますが、みんなが出家して絶えるということは、やはりかなり特異な環境に押しやられた、という

ことを考えざるを得ないですよ。

釈 なるほど。それから話はかわりますが、最近親鸞聖人は源頼朝の甥だという説を聞きました。

頼朝の妹の子どもだという、そんな話が出てますが、それはいかがですか？

岡村 なかなかむずかしいですね(笑)。

釈 むずかしいですか(笑)。

岡村 『親鸞聖人正明伝』に従った説ですが、それは当時の記録じゃないので…。

釈 はい、江戸時代のものですから。

岡村 ですね。後々の時代の話や元にした伝承、伝説からきている話なので、なかなかその辺はむずかしいかなと…。

釈 歴史学的に議論をするのはちよつとむずかしいということですね。よくわかりました。引き続きお話をうかがっていききたいと思います。